

正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点

岡野, 潔

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授 : インド哲学史

<https://hdl.handle.net/2324/17849>

出版情報 : 印度学仏教学研究. 51 (1), pp.393-388, 2002-12. The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

バージョン :

権利関係 :

正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点

岡 野 潔

正量部文献 Mahāsaṃvartanikathā 4.2.16 ~ 17 の二詩節は次のように記す：

「さらに〔仏滅後〕第八の百の年に、無垢の輝きをもつ牟尼たちであるブーティとブツダミトラが、あたかも月と太陽とがこの世界を輝かせるが如く、牟尼の王（仏陀）の言葉を明らかにした。(16) 彼ら二人は語った：〔イネの〕殻の出現をもち、悩まされつづけたる、この劫は第九番目であった。それ（第九劫）にとって、〔人の〕肉体の劣化する七百年のみが今や残されている。(17)」

この 4.2.17 の詩節に出てくる「七百年」という言葉が問題となる。この MSK の予言に近い内容の文は立世阿毘曇論に見つかる (32, 215b23-27)：「是二十小劫世界起成已住者，幾多已過，幾多未過。八小劫已過，十一小劫未來。第九一劫現在未盡。此第九一劫幾多已過，幾多在未來。未來定餘六百九十年在（至梁末己卯年翻度此經為斷）」

以下にこの約七百年の時間をめぐる問題を二つ提出し議論したい。

第一の問題：「MSK のいう七百年とは、作者 Sarvarakṣita が MSK を執筆した年から数えて七百年なのか、それとも Bhūti [ka] と Buddhāmītra の予言の年から数えて七百年なのか」

MSK の 4.2.17 の問題となる文において、「彼ら二人は語った」に続く文のすべてを、Bhū. と Bu. の予言の言葉として、直接話法で表現されていると見るならば、七百年という数字は Bhū. と Bu. のそれを語った年から数えて七百年なのであろう。しかし必ずしも断言できない。MSK という作品においては一詩節の後半に作者 Sa. が彼自身のコメントや感想を入れることが手法としてよく用いられている。従って「それ（第九劫）にとって、〈人の〉肉体の劣化する七百年のみが今や残されている」の文は Sa. が付け加えた私的なコメントの文であるとする可能性もある¹⁾。すると七百年とは Sa. がこれを書いた年から数えて七百年ということになる。しかしその文が Sa. が付け加えた私的なコメントであっても必ずしもそれは Sa. の執筆時（十二世紀）から七百年を意味するとは限らない。もし作者

正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点（岡野）（133）

が作品において私的なコメントを加える場合、作者は読者がその問題について十分周知していることを前提としているはずである。祖師 Bhū. と Bu. があと七百年という予言を行ったということが正量部では周知のこと（常識）になっていたならば、周囲の読者たちのその常識に合わせて Sa. が追加した説明であると解釈することができる。しかも立世論が六百九十、Loka-paññatti が七百、MSK も七百と、どれも七百近い数字で三文献の伝承が揃っているのはどうも偶然とは思われない。立世論と Loka-p の伝承のアーキタイプとなるような位置にあるインド語の原本では「七百」と記してあった可能性が高いと思われる²⁾。この立世論と Loka-p が伝える「七百」の伝承の方も正量部の第五回結集に由来する言葉が伝わったものと考えべきではないだろうか。それは Bhū. と Bu. の言葉のエコーではないだろうか。すると立世論と Loka-p が伝える「七百」と、Sa. の作品が伝える「七百」の一致は偶然ではないことになり、MSK 系と立世論系との、正量部の別々の二系統の伝える「七百」の伝承は、実は同じ歴史的事件に起源をもつことになる。このように、MSK の 4.2.17 の「七百年が残されている」の言葉は Sa. の執筆した時点とは直接関係なく、Bhū. と Bu. の第五結集の時点からカウントされるべき言葉と解釈することが出来る。

立世論の原テキストが成立した時代は極めて古いと思われる。立世論には口承文学の特徴である繰り返しが多い。しかしその中の一節に七百年の予言が付加されたのはそれほど古いとは思われない。Bhū. と Bu. により予言がなされた時代（仏滅後八百年の第五結集）と、立世論（西紀 559 年に漢訳）のインド語の原本の中に七百年の予言が埋め込まれた時代はそれほど時代が離れていないのではないか。

また MSK の「七百年」を Sa. からカウントすると解釈する場合、そう読む私たちは少し不自然さを感じないわけにはゆかない。MSK 4.2.17 の詩を読者が意識の自然な流れで読むならば、作者の言葉ではなく Bhū. と Bu. の二人が語った言葉として七百年の予言の文を読むはずであり、インドの読者ももし注釈書の指示がない限りは、そのように自然な流れで読むであろう。作者も文に私的なコメントを加えた場合には、その文の性質をより明確化するために、文に一人称を使うなりの手だてを用いて、読者の誤解を避けることも出来たはずであろう³⁾。

私は立世論と Loka-p が伝える「七百」という伝承をも正量部の Bhū. と Bu. の言葉のエコーであるとみなしつつ MSK の「七百」の言葉をこの両者の第五結集からカウントされるものと解釈するのが一番よい解釈であると思う。しかしこの解釈では一つ難点がある。私は Sa. の活動年を十二世紀の中頃と推測している⁴⁾。他

(134) 正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点 (岡野)

方、正量部の第五結集が行われたのは立世論の成立以前であろう。遅くとも真諦が中国にやって来た六世紀以前のはずである。すると Sa. の執筆時点である十二世紀の中頃にはたぶん正量部の第五結集からすでに七百年が経ってしまっていた可能性が高いと思われる。もし七百年が経ってしまっていたなら、なぜ予言が実現しなかったのに、記したのか。予言が正確には当たらなかったけれども、そろそろその予言が実現する頃だと考えて、あえて Sa. はその言葉を記したのであるか⁹⁾。予言は七百という年数において正確ではなかったものの、まだ失効したわけではないと考え、あえてその言葉を忠実に引用したのか。あるいは Sa. が自分の生きている時代は Bhū. と Bu. からまだ七百年経っていないと感じていたと考えるべきなのか。この場合、Bhū. と Bu. の生存年か、Sa. の生存年についての私たちの見積もりが誤っているのか、あるいは Sa. 自身の頭の中にある年表が誤っていることが考えられる。このような難点が出てくるわけである。実に判断が難しいが、このような問題点があることによって、私たちは「あと七百年」の予言が、Bhū. と Bu. の時代(四世紀頃?)をカウントの起点にするものと断言するのにも躊躇を覚える。Sa. の時代(十二世紀)をカウントの起点にするものとも考える可能性をも一応残しておかなければならない。

またこのカウントの問題について、次のようにも考えられる。本来同一の文献である立世論と Loka-p は、前者は六世紀、後者は十一～十二世紀と、五百年も離れて別々の国で漢文やパーリ語に翻訳されている。それなのに両者の出す数字があまりに一致している。この事は「何時の年から数えるのか」という肝心な点が正量部では殆ど気にされていなかったことを意味するのではあるまいか。「あと七百年」という予言の言葉は、第五結集の当座は熱がこもっていて真剣に伝承されたけれども、数百年が経つうちに次第に正量部の内で熱が冷めてきて、ただの鸚鵡返しに、上の世代から伝えられた言葉をそっくりそのまま復唱して次の世代に伝えてゆくようになった言葉であると解釈できるのではないだろうか。このように時代が経つうちに、カウントを始める年が曖昧になり、曖昧なままに「七百」という数字が機械的に正量部文献に伝承されていった可能性も否定できない。また予言の真意を考えるならば、正確にいつ劫末が来るかどうかではなくて、数百年後にやがて来るということが大切だったと考えられる。七百という数字はなかなか微妙でよく考えられた数字であり、それはそれほど近くもないしそれほど遠くでない未来を表現できる。あまりに間近な未来であると社会にパニックを引き起こすし、あまりに遠い未来だとのんびりしすぎてしまう。終末の予言の数字と

正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点（岡野）（135）

してはちょうどよい。そこであまり終末へのカウント・ダウンに神経質にならないで、インド人らしく鷹揚に予言の数字を伝えていた可能性がある。このように解釈することも出来る。

第二の問題：「七百という数字は、天啓的な（無根拠な）予言として出てきたのか、それとも理論的に計算されて出てきたのか」

「あと七百年が残されている」という主張が、もしも計算によってなされたものならば、そのような計算が成り立つためには、「仏涅槃後の千五百年後か二千年後に劫末が来る」というような教理が背後にあることが必要であろう。ところが予言の背後にあるはずのそのような計算の根拠たる教理が正量部の四つの宇宙論文献のどこにも見当たらない。「七百年」という文の前後を見ても、その理由が示されていない。これについては次の二つの説明可能性があるろう：

可能性1：理論的根拠がない：「あと七百年」という言葉は高僧の超自然的な智慧に由来する予言の言葉であるために、理論的根拠はない。

可能性2：理論的根拠はある：理論的根拠がたまたま現存する文献に示されていないだけである。仏涅槃後の千五百年後か二千年後かに劫末が来る、といった教理が、「あと七百年」という数字をはじき出した計算の理論的根拠として、存在していた。

これらのうち、可能性1とは、理論的に無根拠であると考えられる可能性である。MSKも立世論もLoka-pも「劫の終わりまで七百年」という予言の根拠理由を全く示さないのであるから、もしも正量部の第五結集を主宰した僧Bhū.とBu.が圧倒的カリスマをもつ予言者のタイプのものであるならば、その口から終末の「啓示」が出たものであったとすれば、啓示の性質上その立言の理由を語る必要はない。その場合はこの可能性1が成り立つ。もしも正量部の終末論的な意見の背後に西方の「啓示宗教」的な要素が大きく働いていたならば、もしもユダヤ教的な終末宗教の影響があるとすれば、このような可能性は否定できない。ユダヤ教的な予言者の啓示とは人知を越えた天啓であるから、無根拠なものである。次に、可能性2であるが、こちらの方が理論好きなインド仏教らしくて、たぶん真実に近いのではないかと私はひそかに思うのであるが、何らかの計算根拠が隠れているという可能性である。もし正量部に「あと七百年」という数字をはじき出した計算の根拠となる説があるとするならば、それを推測できないであろうか。私は二つの仮説を思いついたので、それを以下に述べてみたいと思う。

(A) 涅槃後二千年劫末説の仮説 真諦三蔵——彼の歴史観は正量部とかかわりがある疑いが濃い——が独自の時代観を語る言葉を漢文文献中に探せば、二つ

(136) 正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点 (岡野)

ある。それは次の(1)と(2)である：

(1)：真諦が訳した立世論にある「劫末まであと六百九十年である」という表現。——もし真諦の監修責任のもとにこの「六百九十年」の訳語が生まれたならば⁶⁾、それは真諦の私的な意見が反映された訳語と見ることができる。

(2)：「今は仏滅一千二百六十五年である」という言葉。——この言葉は普光の『俱舍論記』巻十八(大正41.282a)にあり、普光は『真諦云わく、仏涅槃の後、今に至るに、年、一千二百六十五年なり』と記す。もしも普光が散逸した真諦の俱舍論疏かそれに類する疏を用いたならば、上の文の「今」とはたぶん真諦の中国在住年代の中でも特に俱舍論を訳出した年かそれ以降(西暦563～569年)の年を意味するのであろう。

これらの漢語文献に真諦が残した二つの言葉は、それぞれ注目に価する意見であるが、両者はつながらないであろうか。二つの一見バラバラの言葉は、真諦という人物の頭脳の中ではある程度首尾一貫していた可能性はないであろうか。(1)の六百九十年と(2)の一千二百六十五年を単純に足し算すると、 $690 + 1265 = 1955$ で、2000年に45年足りない数字となる。二千年にほぼ近い数字が出てくる。もっと細かく計算するならば、「今は仏滅一千二百六十五年である」という「今」の年をもし西紀後565年とすると、仏涅槃の年はその1265年前であるから西紀前730年になる。また第九劫の劫末の年は、西紀後559年から690年後であるから西紀後1249年になる。730年と1249年を足すと、合計1979年となり、2000年に約20年足りない数字となる。このことは偶然であろうか。この約20年の数字をどの程度説明可能な誤差であるとするかにもよるが、このように(1)と(2)の真諦説を自然につなげると、仏滅後から劫末までの期間がほぼ2000年である、という考えが自然に浮かび上がる⁷⁾。つまり真諦の計算の背後に「涅槃後二千年劫末説」が隠れている可能性が出てくる。真諦が有していた歴史思想は有部や瑜伽師の伝承とは別物で、その思想において正量部とのつながりが想定されるならば(彼と正量部の密接な関係については別論文で扱いたい)、真諦ばかりではなく正量部が「涅槃後二千年劫末説」を有していた可能性が考えられる。

(B) 涅槃後一千五百年劫末説の仮説 インド撰述の経や律を見ると、正法五百年・像法一千年説や正法千年・像法五百年説など、合計千五百年を説くものはたくさん見つかる。インド仏教において法滅の年数に関する議論は、五百・千・千五百・二千・二千五百というように、五百の倍数で論じられるのが普通であると見てよい⁸⁾。正量部で劫末までの計算がなされたとすれば、恐らくその年数は同様に五百の倍数の年数であることが予想される。するとそれは一千五百か二千で

正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点（岡野）（137）

あったのではないか。上で二千年説の可能性を考えたので、次に一千五百年説を考えたい。MSKは4.2.16の偈で、Bhū. と Bu. の両者が、仏涅槃後八百年に結集を主宰したことを告げる。私は先に、立世論が六百九十、Loka-pが七百、MSKも七百と、どれも七百近い数字で三文献の伝承が揃っているのはどうも偶然とは思われないから、立世論とLoka-pが伝える「七百」という伝承も、実は正量部の第五回結集のBhū. と Bu. の言葉のエコーではないだろうかと考えた。つまり、劫末まであと七百年、という予言は仏涅槃後八百年のBhū. と Bu. の口から出たと考える。もし仏涅槃後八百年の人が、あと七百年と予言したとすると、仏涅槃から劫末までの時間は、合計一千五百年ということになる。

以上、二つの仮説を提出してみたが、後者のほうが論拠がしっかりして明快である。将来のより広範な議論のために、このような仮説を複数立てておくことは無駄ではないであろう。

-
- 1) MSKの「それ（第九劫）にとって、〈人の〉肉体の劣化する七百年のみが今や残されている」に相当する文が文献Xにぽっかりと欠けている。この文の有無をめぐるMSKと文献Xの相違はどうして生じたのか理解するのが困難であるが、次の二つの説明可能性があるのであろう：可能性1：MSKの種本である文献Xに「七百年」の主張は無かった。しかしMSKの作者Sa.は、Bhū. と Bu. の言葉としての「七百年」の主張を、正量部内部の伝承に基づいて知っており、その教団史の知識により補った。可能性2：MSKの種本である文献Xにもともと「七百年」の主張は有った。しかしDaśabalaśrimitra（彼はSa.のほぼ同時代人である）が文献Xを自分の著作に引用するに際して、「七百年」の主張の文を時代にそぐわない不要なものとして削除したか、あるいは彼自身が削除する以前に別の人の手によってすでに削除されていた。（仮に「あと七百年」の予言が四世紀になされたとすると、その予言が外れたことを確実に知ったのは十一世紀頃になるはずである。すると十一から十二世紀にかけての正量部の人間がこの予言の文を削除しようと考えたとしても不思議ではない。）つまり、MSKの作者Sa.がMSKの種本として用いた梵本としての文献Xは、有為無為決択の作者Daśabalaśrimitraに引用された文献Xと同じではなかった。——さて、可能性1のようにMSKの作者Sa.が彼自身の判断で「七百年」の主張をBhū. と Bu. の言葉に接続させるかたちで故意に挿入したと考えると、それはSa.の正量部の伝承の理解に支えられた行為であったと考えられるから、たとえ可能性2が成立しない場合にも可能性1が残る。つまり仮に文献Xに「七百年」の主張が無かったとしても、正量部にはそのような伝承があって、それを根拠にMSKの作者はその主張を補ったと考えられる。Sa.は正量部の大和尚であったから、彼が属する正量部の教団が反対するような個人的な解釈を付加したとは到底思えない。

〈キーワード〉 正量部, 終末論, 宇宙論, 真諦三蔵, 予言, 劫末

(九州大学助教授・Ph. D)